

自由連合

Libera Federacio

Nº 35

1972
1月20日

姫路市かめ山354
自由連合社
振替：大阪1264

定価 50円

※先日、ある集会でアナキストというレッテルをばらされた。その人の意味するアナキズムと僕のそれは絶対一致しないし、僕にとっては、御都合主義者というレッテルの方がまだありがたい。(蛙)

労働の官僚制との闘い

自主管理の現場から 北邦彦

★一信★

新しい舞台は

以前のクルーが分解して、一人ひとりがこれからどう生きるかを、現実に着目したところで向かい、それぞれが独自の道を歩んでいく。その過程で、これまでの共同生活の中では育ちようもなかった自然な関係としての愛や友情が、誰に束縛されることなく開花していく。これは、私にとって貴重な経験でした。いくら立派な共同体論を掲げていたところで、現実には解散時の開放感に遠く及ばない集団しか実体化できなかったことを、まず率直に認め、反省することから、私の新たな歩みは始まります。さて私の新しい舞台は、東京の真中、神田に本社を持つ、従業員三〇名程の会社です。こういう零細企業にはじめて労働組合もなく、賃上げは社長の温情一つ、という家族主義ですが、ここには、若くして一五年を経、八〇年代半の際には逮捕者を出した程の歴史と実績を持つ労組が在ります。そして、この労組は、一九六九年四月、労働者による企業の自主管理という、労働運動の全く新しい領域へと踏み出したのです。

闘いの経緯

ここでの資本との対決の中で、最も重視されたのは、労働者の一番身近にいる権力、つまり取組との闘いでした。「仕事をさぼるな」という取組の一声に対しても、すぐさま抗議、取組を囲んでの取組集会、という有様。取組の側に、へたに出世をしたために以前の同僚から激しい追及にあうことへのやりきれなさや消耗感が積み重なり、一人二人と退散していくことになりました。こうして取組の日常の中で一つ一つの奥権を握って

った労働者は、追及の手を休めず、より上部の権力に対しても同様のつきあいを繰り返しました。

この組合は、三月三連の敗北をふまえて、無期限ストローックアウト一機動隊導入、という方向とちがった闘い方を模索していたので、長い闘争の間もストライキはほとんど打たず、何々人の自由な創意に満ちた日常の闘いを基本にしていました。従って、文化祭・文庫・サークル活動など精神面での開花が同時に進行し、これが長い闘いを継続する大きな支柱となったといえましょう。そうこうするうち、経営内容悪化を株主から追及された社長は、労働者のつきあひもあって遂に退陣。闘いは新しい局面を迎えます。経営陣と株主は新しい社長を選出したものの、労組を無視しては二歩も進めぬ状態となり、経営権のかんりの部分が組合にゆだねられました。それから一年後に現在の自主管理体制ができあがります。その転換がスムーズだったのは、一年間に試行錯誤しながらかなり実務的に整理された後、新体制に突入したためです。こういったものが実現する背景には、取組・規模・人員・経営者の質など様々な有利な条件があったといえ、それを最大限に生かした戦術能力と、一人ひとりの労働者の自発性創造性を失なわなかった組織が不可欠なものだったのです。

闘いすんで

では、その労働者自主管理の内実はどうなのでしょうか。経営的には、代表によって経営委員会がつくられ、組合執行部とも密に連絡をとりながら実務的に処理されてあり、経営内容も順調で、株主も静観というところです。また、肉体労働と精神労働が分業化されぬよう、経営委員の期限を決め、なるたけ現場へ足を踏み入れるなど、意識

的に工夫されています。しかし、問題は数多く残され、まだ日々新しく生起しています。この闘いは、その成果以上に労働者の主体形成に重きを置いてきました。にもかかわらず、経営権を握るや、その行手を少数者にゆだね、自足している労働者の何と多いことか。また、資本主義的欲望にどっぷり身を置いていた例には事欠きません。闘いの最中みられたであろう創意工夫は、八組合員の義務の遂行というくどいものもろくでもないものにすりかえられ、官僚主義的な手かせ足かせを成員にはめることをもって組織とみなす考え方が横行しかけています。ああ、スルータスお前もか。

★二信★

昨日のでき事

夕方五時少し過ぎ、あわただしく人が動き出した時です。社長がいつもの調子でつぶやきました。「(小切)のみみがそろわないな」そのときの口から思いもかけなかったことが吐かれました。「要するにやる気がないんです」愕然としました。それが吐き出したものだけに、〇さんの中にたまりにたまっていったものが全てこめられていくような重さを感じました。気持の動揺を和らげるため、エレベーターが上っていたのを幸いにそちらへ行き、Yさんに「のみみがそろっていないそうだよ」と言ううち、やっと平静に戻りました。会社からの帰路もずつとこのことばかり考えていました。

〇さんが執行部の中核として、また二階の責任者として、精いっぱいやっていることは、誰も異議はないでしょう。そして、そういう立場にあれば、いいにくいことのもつとも言わなければならぬのも理解できるつもりです。でもそれは、共に働く仲間、感情の流通——よろこびや、苦しみ、悩みを共にできる、という関係があつてこそこのへ立場でだろうと思います。でなければ、それはいつしかへ管理するものへへと移行していくものだと思います。最近、しばしば感じるのですが、社長が手伝うと仕事ははかどります。(次頁へ)

が、それまでの快いリズムや感情のやりとりは一瞬にしてこわれてしまします。労働者は只談をいつてふざけ合ひながらも、お互いの欠点を注意しカバリーしながら仕事を進めていくものです。ところが、社長のように、仕事をいかに速く能率よくやるかということしか考えない人がいれば、一人ひとりの労働者の誇りやよろこびは無視されてしまします。慣れない危なっかしい手つきで仕事をしている同僚が、能率のためと仕事をとりあげられる姿を見るのは、何とも空しいものです。その意味で、ぼくは社長に働く仲間としての通じあう何物もないと思っています。

ですから、いくら社長のいうことが正しくとも、それを鵜呑みにし、同僚を傷つけるようなことをばくはしたくありません。逆に、その管理者的な言動からいかに自己を守り、同僚を助けるかということにこそ、全力を集中したいと思ひます。それが働く仲間に通じあう、いたわり、優しさの念ではないでしょうか。

★三信

運動としての自主管理へ

ぼくの職場は注文紳士服地商屋（羅紗屋）が林立しているところにあります。ここ数年の繊維関係の不況の上に注文服そのものも魅力あるものではなくなり、わが職場のような加工業以外の業績は下降の一途。今度のドル危機による景気悪化はそれに追いつちをかけた格好になり、合併の火の手があたりここに立っています。

その中で、同盟系でない労組があるために合併話がごとくこわれ、東京への集中合理化に踏みきった羅紗屋があります。各地の男子社員は東京引きあげ、女子社員には退職勧告。自主退職強要、首切りを打ち出して三月あまり、労使双方とも不慣れた団交を繰り返して一進一退を繰り返しています。

ぼくの職場の労組は、この労組とは関係が深く、この閉鎖でも戦術面でのアドバースを行なっています。横で肉いていても、なるほどこれが労働運動の中でつちかわれた経験なのか、と感心させられてしまうことがたびたびです。ところが即ちそのものは、有利な条件がありながら、経営者には

余裕をもたせ、労働者内部には合理化支持派の暗躍を許しています。これをこの労組の労働者の責に帰すのは簡単です。よその会社に来て仲間の悪口をいいあっているのですから、それも半面の真実です。

しかし我々の側には別の視点がなくてはなりません。結成以来一年にも満たない労組に対して、何の経験も深ききざみつけているわが労組は、果たして何を手渡そうとし、現実には何が伝達されたのか、という向を自己に発すること。それを通して、逆に自主管理の現在の姿が浮きばりにされるだろうし、それを反転させて自主管理の真そのものを向う中にこそ、運動としての労働者自主管理がありうる、という立場です。この視点を欠落させるならば、傘下労組を技術的に指導することしかやって来なかった労働官僚と何らかわりのないものになってしまします。

うみ出したものは

彼らに手渡そうとしたものは、因交のかけひきや労働者の組織の仕方などというテクニク次元のものではなかった、とぼくは確信しています。永い向忘れたいための叫びを想い出している時の労働者の表情を見落さなかったつもりです。しかし、向いの中の解放感や楽しさを伝えることはできなかったのも事実です。もし、彼らの今やっているものがへりなりなら、それは何と退屈で窮屈なものでしょう。そして、この退屈さ窮屈さは、そのままだけの職場の雰囲気につながっています。

十・二一反戦デモ。参加の決議どころか話しあいすらしていないのに代々木公園にはほとんど全員が集まりました。しかしその内容たるや、義理人情あり、役職上やむなくというのあり、全体のムードにあしきりてというあり、で惨憺たるものでした。いったい自主管理といいながら、うみ出してきたものは、数多くの小官僚と、組織的重圧によって自主性自発性を喪失した無気力な労働者だけではないのか。いや、悲観的

自連へ特別号の発行企画に協力をお願いします

△目的▽ ミニ通信等を出している自連関係者（推定五〇人）間の交流と紹介。△要項▽ のきみが出しているミニミニの特別号を五〇〇部、△自連紙型▽（B4・横型・右トシ）でつくって下さい。△枚数表二頁に制限。内容自由。の原紙のみ郵送可。ただし乳版紙代自弁のこと。△メロ切三二五〇部、自連大阪（大阪市旭区高野郵便局）へ必着のこと。△表紙をつけ全部をとして、五〇〇部限定で四月発行の予定。定価百円位。参加者は十部無料

に言っているのではありません。こいつに疑似共同性は、その疑似性が深く認識されればされる程、樂觀的な素材なのです。

★四信

ぼくの問題意識は

前のクルー（酪農パルチ）との関係からか、自主管理は、共同体運動あるいはその批判になりえているのか、と向われることがあります。これについて、ぼくは否定的に見ます。自主管理は労働運動の延長として見る方が妥当でしょう。労働運動をやっている中で、かなり偶然もあって乗取りになったのです。

また、批判といっても、現在の自主管理にのっかって他の共同体運動を遠吠えに批判したくはありません。やるとすれば、自主管理の本質と組織原理の追求であり、現在の自主管理運動や組織への批判としてです。

ぼくは今、この自主管理を肯定的に述べる気持はありません。何とて反戦諸君のように解体以外ないなどとはいいませんが。というのは、この運動の過程においても現在でも唯一人実務にすぐれた指導者がいるということに成り立っている面が強いのです。しかもそれが、最近一つの確力となりつつあります。

ですから、自主管理という形態に目を奪われてしまうと、実際とはかなり違った評価になってしまうように思ひます。要は形態でなく、内側において組織の原理に対する追求がなされているかどうかにかかっているのではないのでしょうか。

ぼくの問題意識は、労働者が自立した主体を形成していく時にどうしてもぶつかる労働の官僚制といったものを、どう内側からそして下から強いエネルギーでもってうちこわし、新たなものをつくり出すか、ということ。会社に勤めながら、企業告発・労組告発をしている内部労働者の位相と何らかいにはありません。そこに含まれているものは、自主管理というより占拠といった方が適当なのかも知れません。（完）

すいたくても「くれ」と言えない人間の横で煙草をすうのは酷なことである。「くれ」と言えるのは、実は返せる時だけであり、返すあのない時には「めんどくらし」に受けてしまう。

事情をみんばに説明、出せる者は出す、ということでもカンパを集めた。22322円。少しでも多くの者がするようにはフィルターの工コを買い、一人二本ずつ当てることになった。

盛り上った文化運動

大晦日の夜、とび入りのご自慢大仏が焼かれた。用意されたものは、マイクとスピーカー、伴奏用ギターぐういのもの。立派した者ですら、場がもたなければさつと引き上げるつもりでいた。

ところが、いざふたをあけてみると、六〇〇名もの労働者が集り、ステージは順番待ちの労働者でいっぱいになった。藤圭子の物マネ、浪曲、炭坑節……。「やめろ、やめろ」というヤジも、自分に早く歌わせろというものだった。

当初掲げられていた「紅白歌合戦粉砕」のスローガンはまとはずれだった。釜ヶ崎労働者は紅白歌自戦に象徴されるマス・イデオロギーには無縁であったのだ。他にもたれたもちつき、すもう、ソフトボール大会の成功と合わせて考えるなら、マス・イデオロギーとは無縁であるが故に、釜ヶ崎労働者は創造的人間にうつるのではないだろうか。

運動の源泉

使用した米二八〇キロ。作ったおにぎり九〇〇個。叩一〇キロ。集められた資金カンパ二四万余円……。

前回よりはるかに大規模な形で行われた「越冬対策」は何であつたのだろうか。

一部には批判と、妨害策動すらあった。「慈善事業」「ライオンズクラスのものをね」というのである。

しかし「越冬対策」の中心を担つてきた部分は組合活動家であつた。現実には労働者と接触し、その中で組合運動を発展させようとしている者にとって、「現実」に倒れていく労働者を放置しておくことはできないという実行者の結束

点は矛盾するものではない。むしろこのような釜ヶ崎の問題を直截に表現した、具体的な場の設定こそが、今までの運動に欠如していたのではない。

「慈善事業」は、自らの手を汚さず、現状維持を前提にしながら低劣な人間に施しを与える、そのことによつて「救う」ことのできる自らの良心を得ようとするものである。「越冬対策」をきいたに采にだけの人であつても、**「正月」**を捨て冬の釜ヶ崎に采たことの中に、そのような卑しい人道主義の要素はなかった。

釜ヶ崎における運動の市民権は何によつて生み出さるのか。釜ヶ崎労働者と活動家個々との新たな関係さとのようにして獲得できるのか。批判者一面成分公執行部一にらは釜ヶ崎の事情を、労働者をあまりにも知らなすぎる。

4日、生後一月半の乳児が死んだ。急性肺炎。栄養失調の体には、病魔に抗する力はなかった。

この乳児の両親は、二人目わけて一日一七〇円という低劣な賃金ではんばの炊事夫として働いていた。はんばの中で早産。産後の経過も悪く、はんばを出さうとしたところ、

貧民と結社の場

花田映子

山本義隆は可反秩序にこそ政治の再生地で、私の六〇年代後半は安保スンドとは何であつたのかを追いつめることを一つの課題とした数年間だった、と書いている。全共闘議長をひきうけた彼は、**「中永として一つの実験に賭けてみた、という記だ。」**つまり、全共闘運動は**「中永の後尾燈になったのだ。」**しかし、**「中永の後尾燈が全共闘運動を領導したのは、学園斗争にとって致 的なことではなかったか。」**

山本は又こう書いている。「七〇年に向つて」技術化されていく「政治」に刃向う地獄にあった私たちは「高度成長」の中で「私」をつかみどころなくしていった。一〇年近くも若い諸君により一層の近親感を見出したものだ、と。そして、「反政治性、もしくは「反権力・反秩序」性にこそ私たちの側からする政治の再生はある、と。

確に**「安無永も」**七〇年に向つて「技術化されていく「政治」に刃向う

賃金から手配料一万五千円を合わせて三月四以上を差し引かれ、借金をしよいきされた。親子六人、この寒空に青カシなければならなかったのである。

赤ん坊のミルクを實際問題としてどうするかという考慮なくして、現実を根をおろした運動は望めない。「越冬対策」を行なうにあつて、労働者は客ではない、ということが確認されていく。日刊新聞の発行や誠実な対応を通して、「自分が食つたものは自分で洗う」等の原則はきわめて簡単に実現された。表面的に労働者は「密」ではなかった。だが実行者のメンバーが、技術的、意識的に「主人」意識を克服したかどうかには疑問が残る。

今回の「越冬対策」は、冬といわれれば極限状況の中で、活動家と労働者の信頼関係を生み出し得た。これを保持させ、発展させるのは、「なまけ者を叩長するだけ」と反対していた労働者が、最後には跡片付けを手伝い、「来年はカマの一つでも用意する」と言つた言葉をどう聞くにかかっているのだ。

《補》多くの事を語り終つたとき、そして越冬の発着と自れを「新な振舞ひ」のようなものを言ひてみいと思つた。

地獄にあつたのだが、否、その故にこそ、全共闘運動を乗っ取つた**「中永の後尾燈」**に、より一層の近親感なぞどこにも見出せなかったのだ。そして、学園斗争の場、**「安無永」**によって暴力として表現された「反政治」「反権力」「反秩序」は戦後公教育理想の下での私たちの解体と私の自内を証明している。

即ち、**「中永の後尾燈」**と**「安無永」**は、各々の個性性によって学園斗争の場で他者を見出したへさればこそ**「安無永」**は今もこの問題にこだわり続けるのだ。しかし彼等は、暴力の表現の場をめぐつて出た「反政治」「反権力」「反秩序」の表現の場をめぐつてすれちがったのだ。そのとき私に見出された私には解体し、学園斗争の場は崩壊したのである。他者を見出し得る結社の場は、今何処にあるというのか。

原稿募集 自由なる投稿を待つ。

『非日常』と『日常』の境界線に

六九年に読んで「フリーステイル」のマジテーションが、ぼくの目に時おり開えてくる。尾関弘の「反戦共同労働団」(自連16号)も、彼と発想を異にするらしい杉原哲生の「共同体」も、竜田修の五人組に負っている。ぼくの戦時団も竜田への逆立ちしたあぐらによることは否まない。だが、ぼくらは貪欲である。万重鏡のように共同体を覗き込むことができる。フランス五月叛乱、合衆国におけるイッピー、列島における「時差」多量にないか。そして、尾関のあぐらを逆立ちしたにすぎない杉原のあぐらをうんと受けて、非日常に降すに共同体に否応なくぶつかるとどう。

多量にないかに 日常はなかったか

ぼくは、杉原の視点を否定して
いるのではない。ただ、非日常
というと、もう政治的である
という見解はあやまりである。
たとえば、多量にないかに
が列島を通過する血と土に支えら
れ、何よりもおどろおどろな常民
のさまを凝縮して破砕されたとき、
果して非日常はなかったらうか。
惨憺な非日常は復讐しようとし、
それとのかいのかいの中に解
救区はあったのである。行き倒れ
もあれば半暴力的な強要もあって、
「旅」という連続された生活日
常はあった。でなくて、この現
象は続かない。

「多量にないかに」はそのまま
流動する「共同体」であり、封建
社会のあらゆる束縛から脱出した
民衆がひとりひとり「関係媒体」
として登場することで、歪められ
た実存を表現することであった。
それはぜんたいとして「非日常」
でありながら、ひとにとっては飯
を喰らい寝ることもある「生
活日常」なのである。

ドロップアウトは 日常に対決しつづける

ドロップアウトの志向はヒッピー
から仕込んだのではなく、列島
に根強いものである。それは定着
を拒みつつも、やはり定着を
がたくもっている「日常」に
決しつづける。「日常」から共同体
を「し」というスローガンが対峙し
なければならぬものに、ひと
は「非日常」のなかでも対峙する
のである。

「日常」か「非
日常」かという問
いは、そこいらで
体育会の合宿めい
たことをなして、

「生活共同体」とやにさがっている
男の吐くセリフである。単なる脱出
にしか終わらない「共同体志向」を批
判するには、「日常」からの共同体
を定義するばかりではなんにもなら
ない。そこにとどまる視点からは、
「しつづ」れどか「茶ワンを洗え」
とか、そういう次元にしか到らない。

茶ワンを洗った者と 洗いたくなかった者

南北ワークキャンプの総括めいた
ものは、いま尾関弘から出ていな
いが、「秩序派」無秩序派に分
裂したというの、実はいさか
根源的な相違でない。「茶ワンを洗
った者」と「茶ワンを洗いたくな
かった者」の差異にすぎない。

「洗いたくない」のはどうしてか
という問いが、ひとりひとりにな
れたかどうかは知らない。ぼくの言
えることは、「村」の中の共同体
も場所替えも実はかわらないのだ
ということ、当事者たちが果して
認識していたかということである。

へちなみに、ぼくは「無秩序派」の
ひとをいくたりしか知らないが、風
の便りではそれぞれに「共同体」を
志向して旅立っている。「秩序派」
と通路するパトスがあり、固有に
「日常」と対峙しているから旅立ち
たのであろう。

日常と非日常は 同居している

「日常」⇄「非日常」という図式を
やみくもにかかえている限り、それ
ぞれの運動を分析してとらえる他は
ない。その超則方法は、ある種の「
技術主義」におちいる以外ないだろ
う。あるいは、「洗うのか洗わない
のか」という通俗形に活用された「
カテキズム」問答しかない。

そこでは「関係主体」⇄「関係客
体」の関係が腰をすえ、「場所」に呪縛
されている。杉原の「生活空間」と
尾関の「ワークキャンプ」は決して
結びつかないまま並行するだろう。
「日常」と「非日常」は近しい(神津陽)
のでなく同居している。ぼくらはま
ずこのことをはっきり知るべきだ。
そして、どの道を歩みつつづける
かで、おのれの実存を固執しつづけ
ながら、それらの道を結んでいる間道
を知らねばならない。

「生活共同体」の固執は、着実に
「非政治」的にみえながら、その実
外界の庶民群とは決して交わらない
し、「ゲリラ」はむなしく朽ち果て
るだろう。「ワークキャンプ」の
実践は、連続性をついにとらえること
なく、散乱する志向者群の孤獨を生
むばかりであろう。

生きた人間としての 「多量にない」

いづれのばらばらな「開かれて
いる」原則をもちながら、同じこと
をもっと直截に語った「多量にない」
の「機能」でなく「生きた人間」へ
自己形成する姿はみられない。

「生活空間」から、「場所」替え
によって「非日常」と目されるもひ
とつの「生活空間」に至り、往復す
るとき、彼自身「多量」としてあつた
のであり、それを意識化するとき、
「場所」と彼の関係は変化し、「場
所」はじんわりと趣きをかえる。個
におけるそのような「生活空間」と
の対峙が、多数の個の関係の中では
つきりしてくるとき、ようやく「自
由連合」は端初にいたるのである。

ゲリラが 出るとき

みづからを「多量」にらしめた者
「関係媒体」とよぶ。「関係主体」
たりうる者が「多量」としてあるとき、
はじめに「ゲリラ」は単に出撃する
のではなく、出撃が同時にあたらしい
兵団の組織を意味するのである。

第三世界における民族解放運動の
実戦が、ぼくらに暗示するのは、
だにおのれが民兵として立つばかり
でなく、庶民群を民兵にらしめ、か
つ民兵間の「多量」をなすしめた秘密
である。「ゲリラ日記」はその失敗
例をぼくらに語っている。それは、
戦闘員の「非日常」という「日常」
と南米農民の「日常」との対決を示
している。そうして、チエ・ゲバラ
も実は古典的な「日常」⇄「非日常」
二元論におちいつていることを示し
ている。

イッピーたちは、キャンパスに花
畑と遊園地をこしらえた。今ぼくが
悩んでいるのは、ワロダの腐ったセ
メントをはがして戸家一丁目に芋畑
をつくれなかったことである。それ
は、しかし、今からでも充分可能な
のだと信じている。



自由
発言

「日常」に関するメモ・抄

ある共同体批判 二〇 杉原哲生

①「運動が停滯すると、きまつて、生活者、生活の重さ、が言われる」とは、ある学者のセリフである。ぼくも生活者コンプレックスを持っていることは否定しない。

②高校生の頃、家族帝国主義打倒・日常のトータル否定・日常性からの脱却、などと言っていたが、今、日常の視座、などと言う。その二つの「日常」は同じものなのか、ちがうのか。

③「日常性からの脱却」という時の日常とは、たとえば、ダベリング・深夜放送・試験・たまのデモ……。できあいのもの（エスタブリッシュメント）という感じが強い。

④いま言う「日常」も、飯を喰い糞をし眠り……。深夜放送さながら鉄筆を手にしていることに至るまで、別に変ったこともない。誰か言っていたが、革命のための洗濯も反革命の洗濯も同じこと。

僕にはそいつが、とてつもなくおそろしかったんだ
だから仲間といっしょに逃げたんだ
けれどもそいつはあんまり強すぎたし巨大だった
だから僕等は逃げつづけると
すぐにとつてもつかれちゃった
僕等は長いこと走ったつもりだったけれど
奴にとつちやあそいつはほんのまばたきする間
そんなだけの時間だったんだらう
そしてそれでもそいつはまだまだ強大で
そうしていつに僕を追いかけのをやめないし
だから僕はそれこそ必死で逃げたんだ
ふと仲間を見ると
ああ！仲間達はそいつのふところまで
幸福そうにテレビを見ているじゃないか！
それでも僕はまだまだそいつがおそろしかったので
一人でいっしょうけんめいに駆け込んだけれど
ああ！もう心臓が破裂しちまいそうぞうで
涙がでてるばかりなんだ！

風の本場

⑤「日常の視座」などと言っても日常讀美でないことは言うまでもない。日常は讀美するべきものでも非難するべきものでもなく、まず事実である。

⑥出家が家を出て仏門に入ることであるように、ドロップアウトも脱しっぱなしではない。日々のくり返し（ルーティン）に対する反発反動から出発し、それを拒否しつづけても、行きつくところは、その拒否自体が日常化することをも含めて、日常である。

⑦日常と対立的に非日常を想定し、それによって日常を拒否しようとしては、日常に超えられてしまう。急激な日常に非日常的緊張を対置しても、緊張は持続しえぬものであり、バリケードは風化してしまつたのだ。日常あつての非日常であることを知らねばならない。

⑧通過者にはそれなりの通過のし方があろうというものだ。場所替えが土着と同じ位相にあることを認識するなら、假はその場所替えに自己投企するだらう。

⑨投企とは、そしてドロップアウトとは、日常から飛翔して自由の彼方へ去ることではない。むしろ日常という地面からの跳躍のくり返しに近い。それは地面に足をつけているからこそ可能なのである。

⑩跳躍そのものはすぐまた落ちてくるものだ。だがそれは視座・立場を僅かでも動かす。この運動（緊張と弛緩、移動と転換）の中で、人は自分の依拠している日常そのものを変革

の対象とするようになる。
⑪それは、政治状況として国家に絡めとられている日常を、自らの手に取り戻す一歩となる。

⑫日常への反発反動のみで、行きついた日常を引き受けられない脱出は、一時の脱出がいつまでも続いていると思ひこむことによつて、負の自由（自らが束縛されていると感じずじまつこと）を享受するだけに終る逃避である。

⑬「日常をいうなら共同体をいう必要はない。日常から共同体へいく論理がない」とは号アンクの批判。この人もまた共同体を日常の外に想定しているようだ。「内なる共同体」の「内」とは、市民社会の内、日常の内、である。

⑭共同体は、出かけて行って自分の日常の場とするところではあつても、日常に、いや日常を共同体にということはないのか。——いいま自分の居るその「場」を、どのようにして「その時・共同体」にしていくのか。

⑮ぼくの言うような共同体は、勿論不完全で、萌芽にすぎぬようなものだらう。また、あるものではない。く、つくるものである。

⑯「山間僻地と切り離す」は、都市で……ということではない。都市をつくつても、構造的には同じことである。

⑰勿論、そのような共同体を否定するのではない。それは「武器」としての共同体として必要なものだ。だが問題は、それと呼応する「観念ない共同体」をどうつくっていくのか、である。

⑱少くとも初めは、共同態をなす必要はない。たとえば、一人がデモに出ると、他方が稼ぐ、一人がバクられたら他方が救援……というきわめてありふれた当り前のことに、その萌芽はある。

⑲「役割」を果たすことに於ての結びつき、関係を意識化し、明確化していく中で、そのグループを単位とする生活を営み、生活を闘争に闘争を生活に組み込む。そうしたもののとして「ゲリラ」とか「前衛」とかいうものを考へている。

現代暴力論ノート

（向井孝著、自選双書1）海賊版
が出ました。（二五〇四六五四）
申込み↓松江市北堀町92 古瀬義天

自由連合 35号

1972年 11月20日

11月20日

①ハネ上りエセ活動家 ②拙著家 ③気遣い ④狂人のなかのなかなのです。の⑤に腹をたてた人⑥⑦⑧にあてはまる人は僕の友人デス。の⑨に着看をおしこめた人は、赤旗が聖教新聞を読むことをおすすしめします。まったくばからしくて、読む気になれない人には、いつかヒロイカイフワオロナミンCをあげます。下手クソだと思つた人には、ハナクソをあげます。上手と思つた人はやっぱり氣遣デス。
泣虫日和良死渡世人関東黒組
集団の残党 まき・まこと

伝言板

アンケートの片断に何気なく書かれた言葉が、妙に心に残ったりするものです。伝言板のちよつと変えてみました。提案・報告、なんでもかでもアンケートと一緒に送って下さい。(今月担当・遙)

生産運動 私は友人の仲間とともに、生産運動 — 実際に物質を生産して、く運動を行おうとしています。使用してくれる人、生産運動を行なっている人、いませんか。連絡したいのです。(名古屋 ST)

共同体の会 共同体に関するお話し合いの会をやります。武蔵野・三鷹あたりの人で興味ある人、連絡して下さい。今のところ、一応『思想の科学』9月号を読んできて、ダラダラとしゃべるような会合です。あまり固いこと言う人と全然しゃべらない人はおこわり。連絡は、ぐあらん堂(TEL 0422-22-9411)のアパッチまで。

この欄の記事を書いた人たちの連絡は、連絡先指定のものを除いて、自連社宛でして下さい。責任もって中継します。あなたもこの欄を利用して下さい。

米軍ヘリ墜落

皆さん? 去る12月20日午前8時ごろ、横田基地で何が起こったか知っていますか? マスコミはほとんど扱わなかったこの事件 — 大型ヘリコプター墜落炎上、七名死亡。これは私たちの足下から一〇〇メートルも離れていないところでの事故です。しかも遠く政郷を離れて七人の青年の生命が奪われているのです。この数ヶ月間、米軍機事故は相次いでいます。日本だけでも、8月24日、9月10日、10月19日。この重苦しい不安を取り去り、米国の青年たちと真の友好を保つために、私たちはいかなる行動をとるべきだろうか。あなたの意見・提案をぜひかせて下さい。▽福生市福生2-4-5の2のN3 横田基地解体連合。

ふる里 東京のどまん中に「家」に「ふる里」ができました。会合、宿泊、昼寝、冥想ができて、お酒をくみ交わす部屋があります。傷ついた人には憩いが与えられ、闊う人には「根拠地」になりうる家です。連絡は、東京都新宿区戸塚3-13アマギシズム東京案内所。

共同生活

ようやく「施設共同体」のワンステップ「共同生活」にふみきました。一室に共同図書館も誕生。『共同生活通信』の発行の準備もしています。連絡は、名古屋市中区丸屋町4-32の6川村荘 三浦気付 FIWC東海委員会。

よびかけ

この養護施設に住込んでもう九ヶ月目。奉仕なんて気持はこれっぽっちももちあわず、なぜこんなところへきたのかしらとしきりに疑問に思う。現在の社会福祉の矛盾、親と子のもろいつながら、一時預りの存在としての施設保育の保育者側からみれば、こんなことを話しあえる相手が今すぐほしい。どなたか相談にのってください。(名古屋 MK子 22才)

当方、東京工場勤務転々三直八時間交替労働、導入等の合理化闘争をひかえ、目下コンデイションをととのえつつ、謀術謀略を考えております。長期全面ロック・ガードマンレベルの封鎖・アルバイト闘争・青行隊の組織・地域共闘創出・本社へのデモすわりこみ・職場共闘、等々。まあ新年早々からいくつしなないですみそうです。(東京留米 竹内者 22才)

自己紹介

ワパの耳 僕の職場では、職員の間で不満を吐き出す場として「ワパの耳」という雑誌を出しています。同じ考えをもっている教員仲間との意見交換の場に提供したい。学校について、教育について、先生について、意見を述べて下さい。(ハ王寺 AS 45才)

飛翔

ぼくは××大学経済学部経済学科一年です。今まで音楽を通じての文化運動みたいなものをやってきました。『自連』に刺激され、八月頃からミニコミ『飛翔』の発行を始めました。まわりは右チックなやつらばかりで、自分も知らないうちに巻きこまれそうな危機感みたいなものが出て始めたのです。(東京 KS 19才)

労働者通信

①時事問題が労働者にとつてどういう意味をもつか、②分析孤立させられている労働者の闘いをつなぐ、この二点を主眼に、月三回発行していくつもりです。御批判下さい。

東京都大田区多摩川2-23の13、ひかり荘201 東人社 〒155 50円

広告

月刊キツツ

東京都渋谷区代々木4-5の4 参宮橋ハイリ10号

日本協同体協会 (TEL 370-2813) 一月号、自己教育の源流

(野本三吉責任編集) 二月号、ハ中央から遠く離れて (10・11月号「アメリカン・コミュニケーション」12月号「大地の思想」A・D・ゴールドン」待望あり)

一冊 一五〇円 (特別一六四円) 一年間直接購読 二〇〇〇円

アナーキ

No.8 東京都新宿区東大

久保ノの444松喜ビル バルカン社 気付 アナーキズム研究会

アナーキズム文学ノシユティルナーとブーバノラ・プウイティル序説のノ天皇制破壊への運動ノ一革命家の告白ノH・リードとのインタビュー 定価 一五〇円

編集会議見聞録

12月15日の記

①午前の時大阪着。11時Bアジト3号室をノック。「オウ」という同井氏の声。入室自己確認のため10円をカンパ箱へまぎれ投入。と「これや、これへんか」ボウ痕が果てた体躯にみまう。て、誰かのやうに死の封筒なまき。終つてつと。気がついたらもう夜。

②午の8時30分。遠慮深げなノック。「下條くん来てませんか」金崎で泊っている氏。折々の二カンをと出す。

③午の10時15分。下條なる者こと小池睦見出現。一見労働者風なれど、よくみればまだ高貴の面影。「なんや、まだ仕事はじまってんのや。」「忘年会。編集会議やで。」「Bアジト管理人間井孝こと小川信。コイや絶対に忘年会やしく大論争勃発。一廊下がどたどた騒がしくなる。戸が開いて、一陣の風と共に着く。一段どしりと見せる。大山修作こと尾崎弘。杉原くんまだきてへんのや。」「もう始めよ。」「そのつもりでうち食えてきてへんや。」「いつのまにか尾崎夫人(エッ?)こと司女史。「一号室へうつろ。」「うんもう用意でけとる。」「これは1号室家主二月のいこと忘年女史。

④10時30分すぎ、杉原哲生こと黒川透あらわる。大等一耳生あるいはいよばくれば浪人風。黒いヤシ帽。みんちやよ、とふりむいたさリ。目下欲みくいの日常斗争に熱中。さんさんたててから「エライ肉すくないな」と尾崎氏。とたんにみんちの眼がなや。と目前をとりしんだ下條氏の血に集中。かくして一升五合の酒を四合ぐらい残して忘年会終了。

⑤再び3号室へ移動。午の11時30分自連編集会議いよいよ開始。へみんは幼いこのので、いつも会議は夜中のよしやぐうたつに16本の足をうつこんで。へその赤君は一ふぼくの足え本も仲間入り。「3号一面論文、評判わるいのとちやうな。」「社内報みたいなもの興味ない、というのがあったけどわりあい読んでるよつや。」「これならはもっと一般的な組織論そのものとして表現した方がえ

えな。」「これへ中国の合の合報が、ちやうど自連と同じような合の組織問題をのせている。社内好むらしいらいつころけど、あつたは理念だうはあつても、具体的に新しい組織とすると、暗中模索や。」「それに比べて自連は、ほんの数歩や前進している。」「ぼくらはち、ぼくは自連社にならで、きつめて重人なこし今まこにはなつた新しい組織論をつくり、試行しているのや。それに自信もつてええ。

⑥しかしへその頃の組織論をよんで、なるほどおれ社員や、と動き出すことにはなるやろな?」「そう理解したらカン。これは、いつも社員であれ、となつてくるのやない。そのどきに社員であることを意識するな。せんなの問題や。」「社員の意味はへG・連合の媒体としてに書かれろるのやけど、納得できろるやろな。」「読者と社員のうちには、自連紙を媒体とするな媒体とするなにある。」「客体と媒体...すると自連紙を媒体として関係してろる一方がボクとすると、もう一方は何ですな?」「ボクの質問。」「それが自連社や。」「自連社?」「自連社の機能、はたらきや。もっと具体的にいうと、水へに

いまだにたれや。とろこしと3号の編集発行とその関連の仕事一切。ヤ二に、その35号がキミに伝達する眼にみえない視面の内容、ヤ三にボク・キミを含めた自連読者、社員全部の35号のつけとめなたとその総合的状況として35号にすむもの。」「判ったようで判らぬような一で以下省略の午前3時。」「あーしんぞ。」「一番電車まで、もうよぬよ。」「これは決定のスムーズなこと。」「次はいつやる?」「もうみんなはたりと倒れて返さな。」「(東京 戸駒恒吉)

編集室

⑦たとえば文化運動はもっと具体的に言えば新聞発行は革命運動とは次元が異なるものだという根強い偏見がある。すくなくとも論理的にその偏見を克服している筈でも、それを実践的に克服してはいないという実情がある。それがまたへ自連を中途半端なものにしているというところを、もっと深く認識しよう。この克服がないゆえに、何をやらうとこの裏返しにすぎないのだ。

(小川 信)

金竹「自分の親と金ヶ崎竹竹君が倒れていて、一方しか救い得ないとしたらどちらを救うか」

活「俺は金ヶ崎竹竹君の方を救う」

金竹「ウソツケ」

活「家族との闘争は唯一決別にある竹竹君にいいめられ、あまりにこじな、そして閉じられた存在を活動家Aの中に見た。僕はAを差別者として断定する。その澄んだひとみの中に、被差別者へのコンプレックスを裏返した「奉仕」の思想を読みとらざるを得ないのだ。僕は、それぞれの位相の中で分析され、そして分析されたままのやおうなく関係させられている。」「差別者ゝあるいは「被差別者ゝとして。

プチアルにあるいはブルジョアに生まれたことを悔んだところでの何の役に立つというのか。」「差別者ゝとして生み育てられた自分というものを、もっとラジカルにとらえ返すべきではないのか。自らの位相を、もっともつと語るべきではないのか。自らの位相を語ることはなく、被差別者ゝに奉仕することは、革命、人民ゝどんな大義名分を立てたとしても、もっとも痛烈な差別でしかありようがない。

(岩田 秀一)

たつの2年、初夢は、あろうことか自連社Aアジトだった(オエッ)。ほんの瞬間のものだったのに、妙なほどその場の状況が理解できた。誰かと口論していて、「もう俺は二度とこへは来ない?」と言っている。なぜ短い夢なのにそこまでわかるのかは御想像にお任せする。昨七月末に発狂、自連社に人間関係に疲れ果て、一度離れたことがある。その間に「自連は媒体」というのが判ったような気がして、秋ごろから再び関わっている。しかし、離れる原因となつたものは変っていない。それが変な夢の原因だろうか。

つくづく思う、根えない共同体をつくることの難しさ。新聞発行を通じての「新しい運動・組織づくりの小さな試行モデル」たる自連社が、現実には殆んどそうでない。社員Aの運動と社員Bの運動が、へその時ゝ連合してはいない。社員を編集社員と言ひ換えてもそうだろう。自連社も「連合ゝにはほど遠いのだ。そしてそういうばくよりも、アパートの隣室の人の方がはるかに関係をつくり出すことがうまかったりする。考えてみれば、恋人の一人もいない男が「連合ゝを言うなんざろこがましいのかも知れない。(黒川 達)